

1 データ利活用プラットフォーム “Smart Data Platform (SDPF)”

企業に点在するデータの利活用を容易にし成長エンジンへと変える次世代のプラットフォーム

NTTコミュニケーションズ（以下、NTT Com）はデータ利活用プラットフォーム “Smart Data Platform（以下、SDPF）” により、お客さまのデジタルトランスフォーメーション（以下、DX）に貢献する取り組みに力を入れている。本稿ではサービスメニューが継続的に拡充され、ますます利便性が高まっている SDPF の概要について紹介する。

事業ビジョン “Re-connect X™” 実現に向け「データと価値をつなぐ」

DX にはデータの利活用が欠かせない。しかし企業で毎日生み出されるデータは分散しており、適切なセキュリティ対策をとりながら有効活用するのは容易ではない。この課題の解決に役立つのが SDPF だ。“Flexible InterConnect（以下、FIC）” がデータセンター、オンプレミス環境、各種クラウドまで安全かつ簡単にオンデマンドで接続コントロールするほか、データの利活用に役立つさまざまな機能が揃っている。

NTT Com は 2020 年 10 月に新たな事業ビジョン “Re-connect X” を発表し、SDPF をその実現に向けた柱の 1 つに位置付けている（図 1）。

「Re-connect X” には、コロナ禍によりリモートワールドがニューノーマルとなった世界において NTT Com の価値を再定義し、お客さまやパートナーとの共創によって生活者・ビジネス・社会を安心安全かつ柔軟に『つなぎなおす』という意味が込められています。この考えに基づきサステイナブルな未来の実現に貢献するための取り組みが “Smart World” の実現や ICT インフラのトランスフォーメーションであり、そ



NTT コミュニケーションズ株式会社
プラットフォームサービス本部
データプラットフォームサービス部
サービスクリエイション部門
担当部長 村本 健一氏

の 2 つにも深く関係し『データと価値をつなぐ』役割を果たすのが SDPF です。ここ 1 年ほどサービス部品のさらなる拡充、サービスコンセプトでもある『4つの One』の実現に取り組んでできました。」（村本氏）

「データと価値をつなぐ」ため サービス部品をさらに拡充

NTT Com は継続的に SDPF のサービスメニューを拡充している。データ収集・蓄積に関してはトラフィック制御などの機能を汎用的なサーバーで実現する「VxF 基盤」、通信プロファイルの書き換えや複数保存が可能な SIM「eSIM」、プライベートな 5G ネットワーク「ローカ

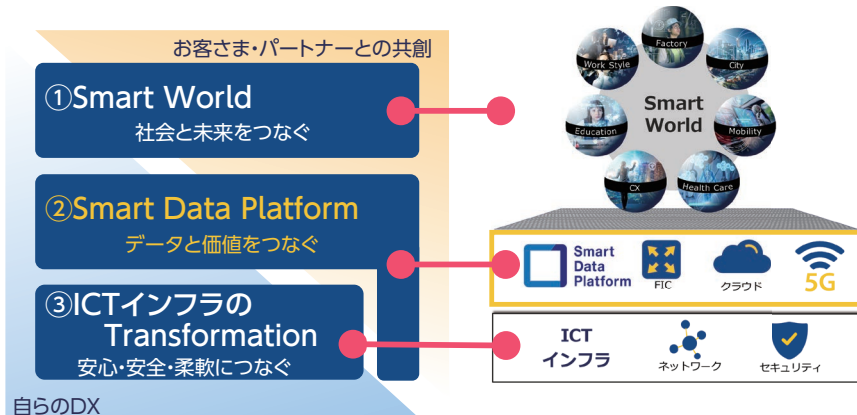


図 1 「Re-connect X」に向けて強化する取り組み

ル5G」などが挙げられる。オンプレミス環境を含むハイブリッドクラウド、マルチクラウドへの対応も拡充した。またデータ分析については専門的な知識がなくてもBI／データマイニングに取り組める各種ソフトウェアをサービスとして提供する取り組みを進めている。これらのサービスについては本特集で別途紹介する。

NTT Comは2021年夏にNTTドコモの子会社になる見込みであり、すでに同社との密接な連携が進んでいることも強みの1つとなっている。特にIoTのような親和性の高い領域で「データと価値のつなぎ方」の幅がますます広がると期待される。

4つのOneの実現が本格化

サービスのコンセプト「4つのOne」の実現も本格化している。これまでサービス申込みやサポート窓口などはSDPFのサービスごとに分かれていたが、2021年度早々にこれらを統一し、SDPFを「UI/UXが一体されたサービス部品の集合体」にしていく。利用者のIDに加え、利用規約や請求書等も全サービスで統一される。

SDPFの導入活用事例

SDPFの提供開始から1年以上が経過し、導入事例やお客さまからの支援依頼も増えている。例えば国内外に拠点が点在しICT環境が複雑化していたお客さまのケースでは、お客さま社内で使われている業務システムのデータを統合し、連携を図った。統合されたデータの可視

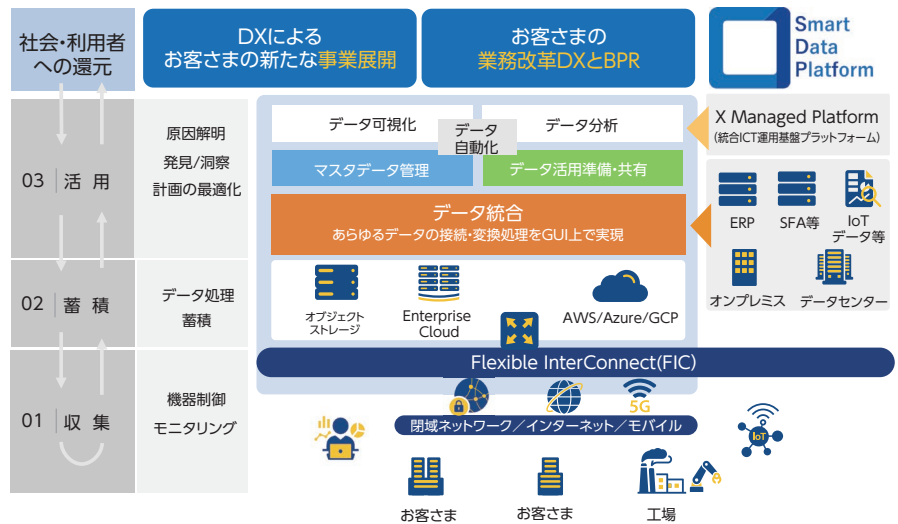


図2 Smart Data Platformによるデータ利活用イメージ

化・分析までデータ利活用をワンストップで支援し、さらに、お客さまの自律的なデータ利活用に向けてデータ統合基盤のガイドライン策定もNTT Comが行い、お客さまのDX推進に寄与している。

また、NTTグループにおいてもITでNTTに関わる全ての人の価値を最大化するために、グループ企業間のデータ統合基盤としてSDPFを活用しており、経営情報の見える化を行い意思決定のスピードを速めるとともに、お客さまを基点とした全てのグループ会社を横断する情報をつなぎ、企業間の垣根を越えてインサイトを共有・活用することで一貫性のある価値をNTTグループ総体で提供することに役立っている。

リファレンスアーキテクチャーを拡充し多様なニーズに応える

SDPFのターゲットは幅広く、DXの進行具合もお客さまによって異なる。導入事例の増加に伴いさまざまなステージのDXに貢献するノウハウが蓄積されてきた。このノウハウを活かし現在力を入れているの

が、ユースケースごとにシステムやサービスの構成をまとめた「リファレンスアーキテクチャー」の拡充だ。

SDPFは幅広いニーズに対応するため、システムに詳しいIT部門のお客さまだけでなく、LOB部門のお客さまに対する提案も増えている。そうしたお客さまの関心はBI／データマイニングツールで何ができるか、といったことに集中しやすく、説明する際にリファレンスアーキテクチャーがより一層役立つ。

「お客さまの本業に役立つ価値をしっかりと提供することが重要です。そのためにもリファレンスアーキテクチャーの拡充に一層力を入れ、SDPFで実現可能な価値を訴求していく方針です。全てアウトソースしたいというお客さまも少なくありませんが、そうした場合にはデータ収集・蓄積の仕組みやネットワークなど、NTT Comがしっかり企画・設計・構築し運用まで行います。お客さまはそうしたレイヤーのことを意識することなく、安心してデータ利活用集中していただくことが可能です。」(村本氏)